

オスが両地域を移動していることが考えられる。

2-11 房総半島におけるニホンザルとアカゲザルの交雑に関する研究

萩原光（房総のサル管理調査会）、相澤敬吾（館山高等学校）、川本芳（京都大・霊長研）

形態観察を行った結果、尾の形にさまざまなバリエーションを観察。尾の長いアカゲザルと尾の短いニホンザルの交雑によりバリエーションが生まれている可能性もあり、交雑の進行が懸念された。しかし、尾の長さなどの形態観察で群の現在の交雑状況を把握することはできていない。現在の交雑状況をより的確に把握するため遺伝子分析調査を行った。本年度4月、アカゲザル及び交雑個体群行動域の館山市神余地区北東側で糞サンプル28個を採集した。この採集地点はこれまでのアカゲザルを含む群観察記録の中で一番北にあたる。糞サンプルのミトコンドリアDNA等の遺伝子配列解析により分析を行った。結果、2頭の判定不明サンプルを除く26サンプル全てアカゲタイプと判定できた。またサンプルの雌雄比は♀18:♂8となった。この群には前回の共同利用研究によりニホンザルメスが群に加入していることが知られている。しかし今回、ニホンザルの遺伝子タイプは出現しなかった。また、今年度、同地域で捕獲された個体や房総丘陵側の捕獲した個体についても血液サンプルを採取しサンプルの蓄積を行った。

2-12 屋久島ニホンザルの成立過程の解明と GIS による遺伝的変異の空間分布解析

早石周平（京都大・院・理）

2004年度には、鹿児島県屋久島に生息するニホンザルの遺伝的研究を進展するため、隣島の種子島にかつて生息したサルの情報収集を行った。種子島のサルはすでに絶滅しているため、標本の収集を目的に現地での聞き取り調査を7月に行った。一市二町で集落毎に昔を良く知る年配者を主に訪ね、合計39人の方々にサルについて聞き取り調査を行った。島の北部、南部ではサルに関する情報はなく、島の中央部でのみ、直接にサルを見たという情報が得られた。このことは1970年の東滋らの聞き取り調査と同じ結果であったが、東らが対象としなかった職種の方々からも同様の情報が得られたことが重要である。また、最後にサルが見られた時期が1950年代であったことを再確認した。今回の聞き取り調査では新しい標本は得られなかったが、70年前に肘から先の手のミイラを見たという情報を得

た。このような標本は、種子島に生息したと思われるニホンザルの遺伝的プロフィールを明らかにし、屋久島と鹿児島県本土に生息するニホンザルとの遺伝的関係を明らかにするための試料として重要である。また、標本はサルの左手首であるが、本土で知られる威猿との関連を検討するためにも、さらに標本を収集する必要がある。今後も聞き取り範囲を広げて、情報と標本の収集に努めたい。

屋久島の地理情報のデジタル化と遺伝的変異の地理的分布の空間解析については、現在も作業進行中である。

3-1 霊長類における内性器の発達及び機能に関する研究—発情周期に伴う前立腺特異抗原 (PSA) の変動—

佐藤至（神奈川県警察・科学捜査研究所）、清水慶子（京都大・霊長研）

【目的】「男児は出生後1ヶ月で母を介して異性の存在を知る—男は女より性的に早熟である」と言う仮説を将来的に立証する為、ヒトのモデルとなる霊長類レベルで実験を想定し、成獣においてもヒト男性と同じ性的成長を遂げているか調べた。

【研究方法】ケージ飼育環境（25℃前後、12時間照明）下の通年発情猿（ヒトモデル：アカゲサル3頭）と季節発情猿（ニホンサル3頭）の尿（蓄尿）を毎週1回ずつ1年間採取し、PSAとテストステロン(T)を測定した。

【研究成果】通年発情サルのPSAは、1年を通してその活性が認められた。季節発情サルのPSAはおおむね10月から1月までの間高く推移し、その後6月頃まで弱まり、8月以降再び活性は強まる傾向が認められた。季節発情サルのT値は、ほぼPSAとパラレルな変動を示した。季節発情サルの発情期（10～2月）と非発情期（3～9月）のPSAとTを比較した場合、両者とも発情期の方が非発情期より有意に高い値を示した。

季節発情サル3頭の内、メスのケージが両サイドに位置する1頭のT値は他2頭の約2倍高く、PSA活性も高い傾向を示した。また、そのPSA活性はメスの月経血観察日に連動して高くなる傾向が認められた。

3-2 霊長類の各種の組織の加齢変化

東野義之、東野勢津子（奈良県立医科大・第一解剖）

心臓の加齢変化を明らかにするため、生後10日から33歳までの30頭のアカゲザルと日本ザルの心臓弁と心臓壁（主に心筋）の元素含量の加齢変化をプラズ